平成24年2月1日

図書館報

光丘

No.140

酒田市立光丘文庫蔵『平家曲集』について

新潟大学教授　鈴木孝庸

今年のNHK大河ドラマであらたな関心をよんでいる平清盛。彼の一生や平家一門の運命、源義仲、源義経の活躍と没落などを伝えてきたのが、古典『平家物語』です。

『平家物語』全十二巻は、原形が鎌倉時代初期に出来た後、盲目の琵琶法師が語り継ぎ語り広めました。〈平家語り・平曲〉の伝統は、晴眼の人も参加するようになり、さらに大きな流れとなりました。『平家物語』は「歴史」でもあり、「文学」でもあり、「音楽」でもあります。

さて『平家物語』のことばに「詞」「白声」「中音」「拾」などの曲節を配分したり、アクセントや声の上げ下げ、さらにどこでどんな旋律の琵琶を弾くのか、などを記した楽譜本も作られました。音譜に相当する模様のような符号は、形が様々に工夫され、今分かっているだけでも百五十点ほどの楽譜本があり、符号の形を目安に分類すれば約十種類になります。楽譜本の考案は江戸時代になってからですが、鎌倉室町時代の〈語り〉の情報も残されていると思われます。一七七六年に出来た『平家正節』が最終形です。私は、各地に保存されている楽譜本の九十パーセント近くを調査し終えました。

光丘文庫御所蔵の『平家曲集』も、『平家物語』の楽譜本なのですが、今まで調査した人はいなかったとのことです。私は昨秋はじめて拝見して、驚きました。これまで大変注目されてきた楽譜本の仲間であることがすぐ分かったからです。この本は、今のところ同種のものが他には二つあるのみです。筑波大学蔵の本（これは『平家物語』の第一巻分のみ）と東北大学蔵の本（こちらはほぼ全巻分）です。光丘文庫の本は、あらたに加わっただけでなく、この種類の本の代表と考えています。符号は『平家正節』や『平家吟譜』に近いのですが、特有の形の符号があることと、「白声」の曲節が変わった現れ方をするのが特徴です。

『平家曲集』でさらに注目したいのは、かなり細かな注が書き入れてあり、面白い情報を提供していることです。「豊田シヤツト教」「豊田ハ御所ト教ル」とあるのは、『平家物語』のあることばを「奴」ではなく「シヤツ」と言うのだとか「御前」ではなく「御所」だよ、と教わったというのです。この教えの主「豊田」は、江戸時代中期の豊田雅一検校と考えられます。豊田検校は『平家正節』より約四十年前に出来た楽譜本『平家吟譜』の指導者です。

また、「ツヨク」「ノル」「ユウニ」「ウクキミ」などと随所に声の微妙な扱い方を指示しています。『平家物語』を表情豊かに語るさまが記し残された、貴重な楽譜と言うべきでしょう。

なお、詳細は「新潟大学国語国文学会誌」第五十四号に発表の予定です。

このたびの『平家曲集』の調査について、後藤文庫長をはじめ光丘文庫の皆様のあたたかな御配慮をいただきました。

案外知られていない 身近な鳥の生態(二)

日本白鳥の会理事　角田 分(わかつ)

カラス

身近な鳥でカラスほど知られているようで知られていない鳥はいないのかなとも思います。

唱歌に「……カラスは山にかわいい七つの子があるから……」と歌われていますが、実はカラスは七個も卵は産まないし、抱卵はメスだけが行い、生まれた子どもは、次の年はまだ繁殖力を持たないということなども知っている人は少ないように思います。それに、昔は、身近にいるカラスは一種類だと考えられていたために「今日はカラス鳴きが悪いから気をつけないと……」というようなことが言われていたことを記憶している方も年配の方にはおられるのではないでしょうか。

庄内のカラスは四種類

庄内地方で一年の間に見ることができるカラスは、実は右の写真のように、四種類いるのです。

ハシブトガラスとハシボソガラスがいるということは今では多くの方が知っているようですが、ミヤマガラスやコクマルガラスというカラスも冬になると北から渡ってくるということをご存知の方はあまり多くないようです。

今では、冬になって庄内平野の水田で集団採餌をしているのは、ほとんどミヤマガラスといえるほど増えています。その中にひょっとすると入っているかも知れないというぐらい少ないのがコクマルガラスなのですが。

ミヤマガラスも元々は、冬に九州を中心に飛来していたのですが、温暖化の影響でしょうか、庄内地方にも大挙飛来するようになったようです。

庄内地方で年間を通してみることができるのが、ハシブトガラスとハシボソガラスの二種類です。そして、ハシブトの方が「カアカア」と澄んだ声で鳴いて、ハシボソの方は「ガアガア」と少しにごった声で鳴いているということも、今では大分知られてきているようです。でもこの二種類、実はもっと違いがあるのです。

ブトとボソの違い

ハシブトガラス

英名をジャングルクロウといって、本来は森林中心に住んでいて木から木へ飛び移りながら餌を探す生活が中心なので歩くのがあまり得意ではなく、地上ではほとんどがホッピング（両足で跳ねて移動する）が中心です。また、食べ物も肉食中心の雑食で、東京でよく話題になるゴミをさらったり、幼稚園の石けんを失敬するのもこのカラスです。

ハシボソガラス

このカラスはどちらかというと広い農地などの耕地を中心に生活するカラスで、歩きながら餌を探す習性があります。ですから食べ物も穀物を中心とした雑食です。

よくTV等で報道されるクルミ割りガラスは、ハシボソガラスです。最上川のスワンパーク周辺や海岸付近でも、上流から流れ着いたクルミをくわえて飛び上がって地面に落として割ってその中身を食べようとするのも注意していると見ることができます。この行動で面白いのが、砂浜でもこのクルミを落とすことをしているのを見かけることがあります。賢いと言われるカラスでもこんなことがあるのかと思わず笑ってしまいます。

また、風が強いときにお寺の屋根の上や高速道路の土手の上で、風で遊んだり、すべり台を滑ったりしたりするのもこのカラスです。

いかがでしょうか。あなたの家のまわりで見かけるカラスはどのカラスでしょうか。

夕暮れになるとねぐらに帰っていくカラス達は、けっして「烏合の衆」ではなくて、今日一日のミーティングをして情報の共有化を図っているそうですよ。

クルミを空中に放り出すハシボソガラス

ニュージーランドの経験を活かす

――ダニーデン・オタゴ大学訪問時に考えたこと――

東北公益文科大学　ニュージーランド研究所
水田 健輔

私は、昨年四月より公益大に奉職することとなり、またニュージーランド研究所に学内研究員として加わっている。ニュージーランドには、過去三回ほど調査目的で訪問しているが（二〇〇一年、二〇〇六年、二〇一〇年）、訪問先については政府機関の集まる首都ウェリントンが中心であり、同国全体をよく知っているとはとても言いがたい。しかし、二〇〇六年のみ、南島のダニーデン（Dunedin）という都市を訪れることができ、他の二回とは随分異なるものを見ることが出来た。

ダニーデンの名称は、ゲール語の「エジンバラ」に由来しており、英国スコットランドからの移民が中心となって街づくりが進められた。よって、市の中心部にあるオクタゴンと呼ばれる広場から周りを見渡すと、石造りの教会に囲まれた風景は、小エジンバラという印象である。観光地としてのダニーデンの魅力は、セントポール大聖堂を中心とした伝統ある建造物が立ちならぶ街並みをゆっくり楽しめる点と、近隣のオタゴ半島に生息する珍しい動物たちということになる。私も要務の合間に車で半島まで連れて行ってもらい、巨大なアルバトロス（アホウドリ）の営巣地を見学させてもらった。季節があまり良くなかったようであるが（八月）、数羽の勇壮な飛翔を見ることができて、同行者共々感激したものである。

さて、ダニーデンの人口は十一万人台であり、酒田市とほぼ同じである。そのうち約十五％は市内に位置するオタゴ大学（University of Otago）の学生で占められているため、大学を中心とした学園都市と言ってよい（その他にポリテクニク（日本の短期大学や高等専門学校のような教育機関）もあるため、学生の比率はさらに高まる）。ニュージーランドの大学は、日本の定義からすればすべて国立大学であり、同国には八つ存在する。その中でも、オタゴ大学は学生数が二万人を超え、南島では唯一医学部を擁する大規模総合研究大学である（また、他都市にキャンパスを持つマルチ・キャンパス大学でもある）。よって、酒田市で例えれば、市内に京都大学があり、町を歩く人たちの五～六人に一人が大学生といったイメージになるだろう。

二〇〇六年当時、私は文部科学省所管の独立行政法人に勤めていたため、ダニーデンに訪問した目的は、ニュージーランド教育省の高等教育担当者およびオタゴ大学のCOO（最高執行責任者）と会議を持つことであった。具体的には、同国で進められている大学改革と日本の大学改革について両国の知見を交換して、今後の政策に役立てようとしたものである。おそらく『光丘』の過去の記事で紹介されていると思われるが、ニュージーランドは、一九八〇年代から政府機関の合理化を急速に進めており、大量の国費が投入されている大学も当然その対象となっていた。

日本の国立大学は、二〇〇四年に文部科学省内部の部署という位置づけから切り離されて独立法人となったが、ニュージーランドでは、すでに一九八九年教育法ですべての大学が政府から独立した機関となっている。ただし、同国の国費が使われている点は変わらず、大学が政府との間で「どのような成果をあげるか」について契約を結ぶ点は、日本の国立大学が二〇〇四年以降に採用した方法を十五年早く実現している。逆に言えば、十五年間の経験を同国から学べば、日本の国立大学が同じ過ちを繰り返す必要はなくなる訳である。

例えば、同国では大学に対する国からの資金は、教育活動と研究活動に分けて配られており、それぞれについて大学の成果を反映するように出来ている。しかし、大学の成果をどのように定義するのか（例えば、「いっぱい学生が来る人気のある大学がいい大学なのか」「教員がたくさん論文を書けばいい大学なのか」など）については、いろいろと失敗や試行錯誤をしていて、その都度改善を積み重ねている。日本では、いまだに教育と研究を分けずに国のお金を国立大学に配っており、過去の成果はほとんど反映していない。しかし、今後は現在の配り方を変えていかなければならないという意見があり、その意味でニュージーランドの経験は貴重な判断材料になる。

「ニュージーランドは国の規模が小さいので日本の参考にはならない」という意見もよく耳にする。私の考えでは、それは情報を入手した側の活かし方次第だろうと思う。もちろん、同国の知見をそのまま日本で使うのは制度の違いもあり難しいだろうが、かなり思い切った試みを日本の三十分の一のスケールで頻繁に実施してくれるため、大変ありがたい「実験場」になっているのも事実である（あまり良くない言い方であるが……）。そして、日本では考えられないようなスピードで、過ちを軌道修正しており、こうした謙虚な反省と迅速な対応はどこの国でも見習うべきではないかと、いつも感じている。

ただ、このように変化が激しいので、同国を研究の対象にしている人たちは、情報を更新するのが大変であり、そこが泣き所なのだが……。

茶筌(せん)供養祭

なごみ会会長
萬 谷 和 子

羽黒山奉納茶筌供養祭
六月十五日

定まっている「十五日」に十分な段取りと考える時間とて無く、唯々夢中で走り廻りました。眞の友は時間や距離でなく、必要なときの友こそ、眞の友であろう。羽黒に荷を運ぶのに、ボランティア、今野光博さん(㈱今野運輸社長)が運転を申し出助かりました。

何事も段取り八分に本番二分と良く申しますが、段取り無しの本番ずれ込みと、今考えても情熱だけで、良くやり得たなあ!、「冷汗三斗」ものです。

小松久雄さん(小松屋社長)が言っておられましたが、「流れる汗を拭こうともせずに、走り廻ってる萬谷さんの姿には感心したよ。」

心の闇の中にいた私を、救って下さった「生命の恩人」羽黒修験「山伏」の神林茂丸(しげまる)様の「大恩にむくいる道は唯一つ」茶筌供養祭を何としても成功させることが、その恩に報ゆる唯一の道と信じた私、その一点に凝血して集中してきました。

神林ご夫妻との出会いは、私の人生において生きることの価値、人間愛に満ちた教えを受けました。悪と悩みのおかげで、生は生きるに値いするのだ、悪が存在しなければ喜びもまた存在しないことを、信念と情熱、出羽三山、千四百有余年の歴史より学び、深さ、過去、現在を問わずに様々な事象に、手元に集められた多くの「資料・写真」私の全く知らない世界のことを情熱を持って真剣に教えて下さいました。

その中に私との不思議な出会いの一頁がありました。昭和十七年(一九四二)会津若松より古道具商、今野武夫ご夫妻が喚鐘と銅鑼を背負って供養をして下さいと、神林さんに来ました。

家庭が不運続きで、考えてみると、=喚鐘と銅鑼=が手許に入ってよりと考えられるので持参しました。供養をして下さいとの切なる願い現在も(朝・夕)茶を点てて、供養をしております。

昭和二十二年(一九四七)山形の鋳物師、長谷川雅山・親子が見えられ、第二次大戦後の混沌とした社会状勢、生きることだけでもきびしく、大変な時代でした。

神林茂丸様は、羽黒山に、世界平和祈念塔の建立を考えてました。

極端に物資の困窮な時代です。「銅鑼を原料として使って下さい」と長谷川雅山に渡し造られたものです。平和塔の頭上の御霊鳥は三山をお開きになった蜂子皇子の道先案内をしてくれた、三本足の御霊鳥八咫烏(やたがらす)です。

―「羽黒山のシンボル」―

千利休の子、「千少庵」が会津城の殿様、千利休七哲の一人である、蒲生氏郷に一時預りの身となって、都へ帰る時、会津へ置いて行ったものが、巡り巡って、古道具商、今野武夫の所に入ったのではの説。

千利休との関係があり歴史より学ぶ、ロマンに満ちた話です。

六月十五日碑前祭にて喚鐘を飾ります。

ご参列の方々、「撞木(しゅもく)」で四〇〇年前の長い沈黙を破り、塚の前で澄みきった音色が深い感銘を与えてくれます。

第一回羽黒山奉納茶筌供養祭が昭和六十年(一九八六)六月十五日、考える時間もありません。無我夢中で、友人の支えや善意の協力によって、何とか終えることが出来ました。県民講堂、神林茂丸様のお話し。呈茶を大日本茶道学会酒田、川合淑仙社中の協力。

今後、どの様に考えたら良いのか。

―「明歴歴・露堂堂」―

基本的なことを平常な心で考えよう。

一、寄付は願わないこと
二、自分に掛る費用は自分で払う様式
三、毎月積立する会計方式はしないこと

その様な、三本柱を考えよう、二に対して細部に渡って計算して算出、年一回の会計、少ない会計の中より切りつめて、(五年毎にイベントを企画しよう)小さな夢ですが、企画をする楽しみと夢の実現に、茶人の一致協力は、見事なものでした。

一番誇らしく、美しくおもうことは、酒田地区の五流派、裏千家流、日本茶道学会余目、大日本茶道学会酒田、江戸千家不白流、玉川遠州流の責任者が供養祭という、新しい文化の基本を試行錯誤をくり返しながら、打ち立てたことです。

垣根の無い、貴重な意見をオープンに話し合い、お互い納得しながら、今日あることを誇りにおもうのです。

一年一度の再会を喜びあい、うれし涙に手を取り合ってる姿、霊山羽黒山ならではの光景です。

―「和気満高堂」―

鶴岡地区よりは、第一回目より、ご参加頂けませんでしたので、私の努力が、足らなかったのかしらんと、反省し、鶴岡市藝術文化協会会長日向文吾、遠州会庄内支部支部長犬塚又太郎、お二方とお会いし、供養祭の経過を話しました。(日向様・犬塚様)この世界に精通なされておられる方です。

素直な私を、可哀想に思われたのでしょう。鶴岡地区は、むずかしい土地柄なんだよ、表向きに対処することの、難儀をそうっと教えて下さいました。

とても良いことなので、蔭より声援を送るので頑張って下さいね、手紙も戴きました。私なりに、かけがえの無い心のぬくもり、心のくすり箱に、一杯いっぱい収めていることが大きな財産、人生に役立つ生きた知恵、情を添えて教えて下さる幸せだなあ。

「茶筌供養祭」
ありがとう、の五文字を刻んで。

「諸家文書目録Ⅰ」伊東家文書 解題 その二十五

前光丘文庫古典籍調査員
土岐田 正勝

「一六、交通・運輸」より

一、「交通・運輸」の内容別史料数

伊東家文書目録「交通・運輸」の項には、合計三二九点が含まれている。その内訳は、㈠海運一七点、㈡御蔵宿二点、㈢川船二二九点、㈣丁持（積み降ろし作業者）・瀬取三六点、瀬取とは親船の積荷を小船に移し取ること、㈤通行（出国）二六点、㈥人馬の継ぎ立て一六点、㈦旅宿三点である。

交通・運輸史料三二九点の内、その七十％近くが川船史料であることも、最上川を始めとする大小河川舟運に、内町組大庄屋が大きく関わっていたことを示している。

海運史料一七点の過半が江戸・大坂への廻米に関する史料であり、それ等を内容別に大別すると、①幕府からの浦触に関するもの、②城米の沖瀬取に関するもの、③難船・破船発生時の弁米返済に関するもの、④水戸（河口・港口）の水深や港口銭（くぜに・手数料）に関するもの、⑤城米積廻船の火気見回りに関するもの、等である。なお浦触とは、難船・漂流・島抜け・海岸での事件等を、浦々（各港）に触れ伝えることである。また城米とは、幕府領の年貢米等のことである。

二、江戸幕府も注目していた「西廻り航路」開設直前の浦触例

江戸幕府が、河村瑞賢に城米の海上輸送ルートの新設を託した根底には、江戸商人が独占的に請負ってきた廻米機構を、幕府直営に刷新することであった。そして運送日数を短縮し、蔵敷料や船賃の軽減を図るとともに、安全な航路を開発することが、大きな目標であった。

河村瑞賢は海路の危険度、寄港地の便等を事前に踏査し、「西廻り航路」と称されるルートを創設し、羽州幕領米積出港の起点を、酒田港に決定した。

最上川河口右岸に「瑞賢庫」が築設される前年の寛文十一年（一六七一）十二月二十一日、幕府の重鎮（老中他）である稲葉美濃守・久世大和守・土屋但馬守・板倉内膳正の四名が連署して、羽州秋田までの浦々に浦触を発しているが、伊東家文書の中に、その史料の覚（写し）が含まれている。

その内容は、幕府領の延沢（尾花沢）・漆山・大山の城米を江戸へ廻送する際の留意点を示したものである。すなわち暴風雨に遭遇して難船し、濡米を生じた場合は、城米を紛失しないように全力を尽し、最寄りの港に河村瑞賢配下の者が駐在する場合は、その港の年寄（町の世話役）に、早急に事情を報告するように、というものである。

江戸幕府は酒田港を起点とする「西廻り航路」創設に注目し、各港に城米廻送にともなう航海上の注意事項を発信したものであり、きわめて貴重な史料である。

港町酒田は、河村瑞賢が「西廻り航路」の始発港を酒田港と決定して以来、飛躍的に発展する。

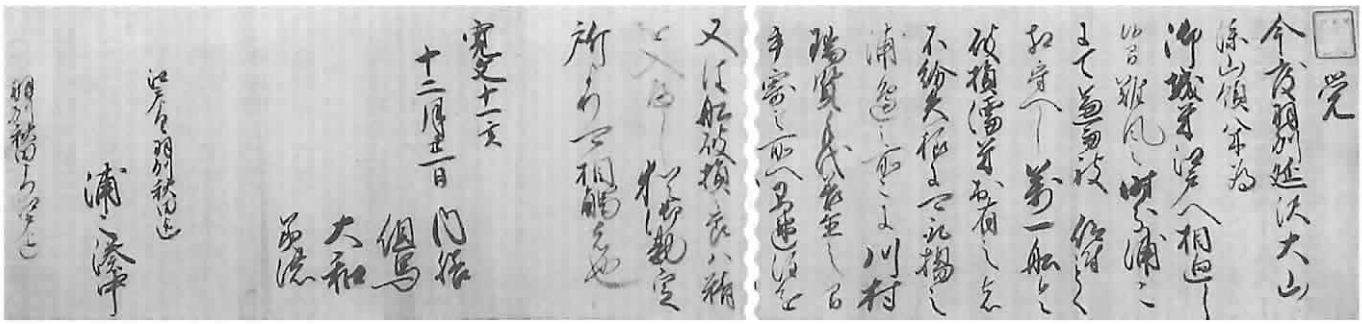
覚

今度羽州延沢大山
漆山領米為二
御城米一、江戸へ相廻し
候間、難風之時分、浦々
尓て、兼而被二仰付一候ことく
相守へし、万一、船之
破損濡米於レ有レ之者、
不二紛失一様尓、可二取揚レ之、
浦辺之所々尓、川村
瑞賢手代差置之間、
年寄之所へ、早速注進
いたし、可二相渡レ之、浦
役有レ之湊たりといふとも、
御城米舟之儀候間、
不レ可レ取候、惣而何方
より相廻し候御城米
堂りといふとも、難風
又は、船破損之節ハ、精
を入扁し、猶、御勘定
所より、可二相触一者也

寛文十一亥
十二月廿一日　内膳
但馬
大和
美濃

江戸より羽州秋田迄
浦々湊中
羽州秋田より江戸迄

（以上）



羽州延沢・漆山・大山領、城米、江戸廻米の浦触（酒田市立光丘文庫所蔵）

読書感想文

四人の心は通じてる

酒田市立泉小学校
二年　野村理智

りくくんはスピーチがきらいです。うまくしゃべられないし、どきんどきんして、朝食べたごはんが口から出てきそうになるからだそうです。アンドレくんは、あんまり日本語が上手ではないけれど、うれしそうに「かっぱ」の話をしました。みんながわらった時はすこしはずかしそうでした。みかちゃんは、しゃべられなくてこくばんの前でかたまってしまいました。ぽたんとなみだをおとしせきにつきました。「イケノオイ」は、学校の池でそれを聞いているんだなと思いました。まい日、学校の音を聞いているのです。わらっている声を聞くと、たのしい気分になります。でも、そうではない声を聞くと、いっしょにかなしくつらい気分になっていたのかもしれません。

イケノオイは三人の前にすがたをあらわしたのはどうしてなんだろう。ぼくは、ふしぎに思いながら本を読んでいました。

「あまいにおいがしたからついふらふらと出てっちゃった」とイケノオイは言っていたけれど、それだけじゃない気がします。三人にわらいがもどってくるように、イケノオイが力をかしてくれたんじゃないかなと思います。いっしょにしゃべって、歌って、おどって、元気づけてあげたかったんじゃないかな。ほんとの気もちを出し合って、聞き合って、らくちんにしてあげたかったんじゃないかな。三人が、いつもは言えない気もちを池の中で話している時、「イケノオイは、にこにこしながらぼくたちを見てた」って書いてあったからそう思いました。

三人とイケノオイは、もう会えないんだろうな。でも、イケノオイは、三人の友だちのことをいつでも見てくれているんじゃないかな。りくくんたちが、イケノオイをいつまでも大切に思っているように。

ぼくたちは、イケノオイの力を借りることはできないけど、友だちと心を通じ合わせて、「わらい声」がいっぱいの学校をつくっていくことはできるんじゃないかなと思います。

（『がっこうかっぱのイケノオイ』山本悦子作・童心社）

第五十七回青少年読書感想文コンクール山形県審査会　小学校低学年自由読書の部　最優秀

掲載の最優秀作品のほか、同コンクールでは酒田地区小中学生から次の作品が「最優秀」、「優良」に選ばれました。

〈小学校中学年自由図書の部〉
○最優秀
「ぼくもファーブルになりたい」（『少年少女 ファーブル昆虫記3』）
内郷小　四年　佐藤　太紀

〈中学校課題図書の部〉
○優　良
「夢を実現するために」（『夢をつなぐ　山崎直子の四〇八八日』）
酒田一中三年　佐々木正深

また、次の作品も「入選」になりました。

〈小学校低学年課題図書の部〉
「みんなおんなじ」（『エディのやさいばたけ』）
一條小　一年　小関　来海

〈小学校中学年自由図書の部〉
「二人のずる休みにかんぱい！」（『ずる休みにかんぱい！』）
亀城小　三年　後藤　誠司

〈小学校高学年自由図書の部〉
「ぼくの大切なもの」（『ＨＩＶエイズとともに生きる子どもたちケニア』）
若浜小　五年　小松　佑
「夢仲間」（『Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ』）
亀城小　六年　齋藤　小春

〈中学校自由図書の部〉
「戦う図書館」（『図書館戦争』）
酒田四中三年　和田　舞冬

執筆者紹介

鈴木　孝庸（新潟大学人文社会・教育科学系教授）
角田　分（日本白鳥の会理事）
水田　健輔（東北公益文科大学教授、ニュージーランド研究所）
萬谷　和子（羽黒山茶筌供養祭奉賛会なごみ会会長）
土岐田正勝（東北公益文科大学非常勤講師、郷土史家）
野村　理智（酒田市立泉小学校二年）

デザイン　佐藤十弥

発行　酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫
酒田市中央西町二番五九号　電話(24)二九九六番
酒田市日吉町二丁目七番七一号　電話(22)〇五五一番
印刷　㈲中央印刷

酒田市立図書館ホームページ
http://www.library.sakata.lg.jp/